日蓮大聖人御書全集

三三蔵祈雨事

さんさんぞうきうのこと

新版
1940
〜
1945

三三蔵祈雨事（さんさんぞうきうのこと）

建治元年（’75）6月22日　54歳　西山殿

夫れ、木をうえ候には、大風ふき候えども、つよきすけをかいぬればたおれず。本より生いて候木なれども、根の弱きはたおれぬ。甲斐なき者なれども、たすくる者強ければたおれず。すこし健げの者も、独りなれば悪しきみちにはたおれぬ。

また、三千大千世界のなかには、舎利弗・迦葉尊者をのぞいては、仏よにいで給わずば、一人もなく三悪道に堕つべ

かりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて、一切衆生はおおく仏になりしなり。まして阿闍世王・おうくつまらなんど申せし悪人どもは、いかにもかなうまじくて、必ず阿鼻地獄に堕つべかりしかども、教主釈尊と申す大人にゆきあわせ給いてこそ仏にはならせ給いしか。

されば、仏になるみちは善知識にはすぎず。わがちえなににかせん。ただあつき・つめたきばかりの智慧だにも候ならば、善知識たいせちなり。

しかるに、善知識に値うことが第一のかたきことなり。

されば、仏は善知識に値うことをば、一眼のかめの浮き木に入り、梵天よりいとを下して大地のはりのめに入るに譬たとえ給えり。しかるに、末代悪世には悪知識は大地微塵よりも多おおく、善知識は爪上の土よりもすくなし。

補陀落山の観世音菩薩は善財童子の善知識、別・円二教を教おしえて、いまだ純円ならず。常啼菩薩は身をうって善知識を求もとめしに、曇無竭菩薩にあえり。通・別・円の三教をならいて、法華経を教おしえず。舎利弗は金師が善知識、九十日と申せしかば、闡提の人となしたりき。ふるなは一夏

の説法に大乗の機を小人となす。大聖すら法華経をゆるされず。証果のらかん、機をしらず。末代悪世の学者等をば、これをもってすいしぬべし。天を地といい、東を西といい、火を水とおしえ、星は月にすぐれたり、ありづかは須弥山にこえたりなんど申す人々を信じて候わん人々は、ならわざらん悪人にははるかおとりてあしかりぬべし。

日蓮、仏法をこころみるに、道理と証文とにはすぎず。また道理・証文よりも現証にはすぎず。しかるに、去ぬる文永五年の比、東には俘囚おこり、西には蒙古よりせめ

使着

つかいつきぬ。日蓮案じて云わく、仏法を信ぜざればなり。定めて調伏おこなわれんずらん。調伏はまた真言宗にてぞあらんずらん。月支・漢土・日本、三箇国の間に、しばらく月支はおく、漢土・日本の二国は真言宗にやぶらるべし。

善無畏三蔵、漢土に亙ってありし時は、唐の玄宗の時なり。大旱魃ありしに、祈雨の法をおおせつけられて候いしに、大雨ふらせて上一人より下万民にいたるまで大いに悦びしほどに、須臾ありて大風吹き来って国土をふきやぶり

興　醒

しかば、きょうさめてありしなり。またその世に金剛智三蔵わたる。また雨の御いのりありしかば、七日が内に大雨下る。上のごとく悦んでありしほどに、前代未聞の大風吹きしかば、「真言宗はおそろしき悪法なり」とて月支へおわれしが、とこうしてとどまりぬ。また同じき御世に、不空三蔵、雨をいのりしほどに三日が内に大雨下る。悦びさきのごとし。また大風吹いて、さき二度よりもおびただし。数十日とどまらず。不可思議のことにてありしなり。これは日本国の智者・愚者一人もしらぬことなり。しらんとおもわば、

日蓮が生きてある時、くわしくたずねならえ。

日本国には、天長元年二月大旱魃あり。弘法大師を神泉苑にして祈雨あるべきにてありしほどに、守敏と申せし人、すすんで云わく「弘法は下臈なり。我は上臈なり。まずおおせをかぼるべし」と申す。こうに随って守敏おこなう。七日と申すには大雨下る。しかれども、京中ばかりにて田舎にふらず。弘法におおせつけられてありしかば、七日にふらず、二七日にふらず、三七日にふらざりしかば、天子、我といのりて雨をふらせ給いき。しかるを、東寺の門人等、我が

師の雨とごうす。くわしくは日記をひいて習うべし。天下第一のわわくのあるなり。これより外に弘仁九年の春のえきれい、また三鈷なげたることに、不可思議の誑惑あり。口伝すべし。

天台大師は、陳の世に大旱魃あり、法華経をよみて須臾に雨下らす。王臣こうべをかたぶけ、万民たなごころをあわせたり。しかも大雨にもあらず、風もふかず、甘雨にてありしかば、陳王、大師の御前におわしまして、内裏へかえらんことをわすれ給いき。この時、三度の礼拝はありしなり。

去ぬる弘仁九年の春、大旱魃ありき。嵯峨の天皇、真綱と申す臣下をもって冬嗣のとり申されしかば、法華経・金光明経・仁王経をもって伝教大師祈雨ありき。三日と申せし日、ほそきくも・ほそき雨しずしずと下りしかば、天子あまりによろこばせ給いて、日本第一のかたことたりし大乗戒壇はゆるされしなり。伝教大師の御師・護命と申せし聖人は、南都第一の僧なり。四十人の御弟子あいぐして、仁王経をもって祈雨ありしが、五日と申せしに雨下りぬ。五日はいみじきことなれども、三日にはおとりて、し

かも雨(あめ)荒(あら)かりしかば、まけ負にならせ給(たま)いぬ。これをもって弘法(こうぼう)の雨(あめ)をばすいせさせ推給(たも)うべし。

かく法華経(ほけきょう)はめでたく真言(しんごん)はおろかに疎候(そうろう)に、日本(にほん)ほろぶ亡べきにや、一向真言(いっこうしんごん)にてあるなり。隠岐法皇(おきのほうおう)のことをもって思おもうに、真言(しんごん)をもって蒙古(もうこ)とえぞ蝦夷とを調じょうぶくせば伏日本国(にほんこく)やまけんずらんとすいせしゆえに、負推このこと、いのちを捨命すててい言いてみんとおもいしなり。いい思し時(とき)は、でしらせいせしかども、いまはあいぬれば、心(こころ)よ言弟子制今合かるべきにや。漢土(かんど)・日本(にほん)の智者(ちしゃ)、五百余年(ごひゃくよねん)が間(あいだ)一人(いちにん)もし知

らぬことをかんがえて候なり。

善無畏・金剛智・不空等の祈雨に、雨は下って、しかも大風のそい候は、いかにか心えさせ給うべき。外道の法なれども、いうにかいなき道士の法にも雨下ることあり。まして仏法は、小乗なりとも、法のごとく行うならば、いかでか雨下らざるべき。いおうや、大日経は、華厳・般若にこそおよばねども、阿含にはすこしまさりて候ぞかし。いかでかいのらんに雨下らざるべき。されば、雨は下って候えども大風のそいぬるは、大いなる僻事のかの法の中に

雑

まじわれるなるべし。弘法大師の、三七日に雨下らずして候を、天子の雨を我が雨と申すは、また善無畏等よりも大勝いにまさる失のあるなり。

第一の大妄語には、弘法大師の自筆に云わく「弘仁九年の春、疫癘祈れいをいのりてありしかば、夜中に日いでたり」と云々。虚事言かかるそらごとをいう人なり。このことは日蓮が門家第一の秘事なり。本文をとり、つめていうべし。仏法はさておきぬ、上書にかきぬること、天下第一の大事なり。つて仰におおせあるべからず。御心ざしのいたりて至候えば、

驚
おどろかしまいらせ候。
日蓮をば、「いかんがあるべかるらんとおぼつかなし」と
思　覚　束
おぼしめすべきゆえに、かかる事ども候。むこり国だに
こと　そうろう　蒙　古
強　責
もつよくせめ候わば、今生にもひろまることも候いなん。
そうら　こんじょう　広　そうら
激　当　悔　辺
あまりにはげしくあたりし人々は、くゆるへんもやあらん
ひとびと
ずらん。
　外道と申すは、仏前八百年よりはじまりて、はじめは
げどう　もう　ぶつぜんはっぴゃくねん　始　初
二天三仙にてありしが、ようやくわかれて九十五種なり。
にてんさんせん　漸　分　くじゅうごしゅ
その中に多くの智者、神通のものありしかども、一人も生死
なか　おお　ちしゃ　じんずう　者　いちにん　しょうじ

をはなれず。また帰依せし人々も、善につけ悪につけて、皆三悪道に堕ち候いしを、仏出世せさせ給いてありしかば、九十五種の外道、十六大国の王臣・諸民をかたらいて、あるいはのり、あるいはうち、あるいは弟子あるいはだんな等、無量無辺ころせしかども、仏たゆむ心なし。「我この法門を諸人におどされていいやむほどならば、一切衆生地獄に堕つべし」とつよくなげかせ給いしゆえに、退する心なし。この外道と申すは、先仏の経々を見て、よみそこないて候いしより事おこれり。

離　きえ　ひとびと　ぜん　あく　みな
さんあくどう　お　そうら　ほとけしゅっせ　たま
くじゅうごしゅ　げどう　じゅうろくだいこく　おうしん　しょみん　語
罵　打　檀　那　とう
でし
むりょうむへん　殺
ほとけ　弛　こころ　われ　ほうもん
しょにん　脅　言　止　いっさいしゅじょうじごく
お　強　歎　たま　たい　こころ
げどう　もう　せんぶつ　きょうぎょう　み　読　損
そうら　こと　起

今もまたかくのごとし。日本の法門多しといえども、源は、八宗・九宗・十宗よりおこれり。十宗のなかに華厳等の宗々はさておきぬ、真言と天台との勝劣に弘法・慈覚・智証のまどいしによりて、日本国の人々、今生は他国にもせめられ、後生にも悪道に堕つるなり。漢土のほろび、また悪道に堕つることも、善無畏・金剛智・不空のあやまりよりはじまれり。また天台宗の人々も、慈覚・智証より後は、かの人々の智慧にせかれて天台宗のごとくならず。されば、「さのみやはあるべき。いおうや日蓮はかれにすぐべ

き」とはわが弟子等おぼせども、仏の記文にはたがわず。

「末法に入って、仏法をぼうじて無間地獄に堕つべきものは大地微塵よりも多く、正法をえたらん人は爪上の土よりもすくなし」と涅槃経にはとかれ、法華経には「たとい須弥山をなぐるものはありとも、我が末法に法華経を経のごとくにとく者ありがたし」と記しおかせ給えり。

大集経・金光明経・仁王経・守護経・はちないおん経・最勝王経等に、「末法に入って正法を行ぜん人出来せば、邪法のもの、王臣等にうったえてあらんほどに、彼の王

臣等、他人がことばについて、一人の正法のものを、あるいはのり、あるいはせめ、あるいはながし、あるいはころさば、梵王・帝釈・無量の諸天・天神・地神等、りんごくの賢王の身に入りかわって、その国をほろぼすべし」と記し給えり。今の世は似て候ものかな。

そもそも、各々はいかなる宿善にて日蓮をば訪わせ給えるぞ。能く能く過去を御尋ねあらば、なにと無くとも、この度生死は離れさせ給うべし。すりはんどくは、三箇年に十四字を暗にせざりしかども、仏に成りぬ。提婆は、六万蔵

を暗にして無間に堕ちぬ。これひとえに末代の今の世を表するなり。あえて人の上と思しめすべからず。事繁ければ、止め置き候い畢わんぬ。

そもそも、当時の悤々に、御志申すばかり候わねば、大事のこと、あらあらおどろかしまいらせ候。

ささげ・青大豆、給び候いぬ。

六月二十二日

西山殿御返事

日蓮　花押